

ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2007/7 第41号

ホタルとの関わりを再度考える

日本ホタルの会副会長 鈴木浩文

日本人のホタルに対する思い入れはたいへん強く、古くから詩歌や文学、映画などに登場してきました。それは、精神的な面によるところが大きいと思われますが、背景には、漢字文化圏にみられる、“亡くなった人の魂がホタルの光になって、何かを伝えに戻ってきた”という「靈魂化虫」の想いがあるのかもしれない(本ニュースレターNo.8, 1997)。このような感覚は、虫の音についてもよく例えられています。東洋人の脳では、虫の音を聞いているときには音楽を聴いているときと同じ領域が活動しているけれども、西洋人では雑音を聞いているときと同じ領域が活動していると。

このような虫を愛でる感覚を持ち合わせてきた私達ですが、自然そのものの捉え方についてはどうでしょうか。ホタルだけを溺愛するあまり、カワニナはホタルを増やすための単なる餌になり、増やしたホタルは、各地のホタル祭りで放たれ、また、それを見学にくる人たちのマナーにも、目に余るところがあ

るのではないのでしょうか。西洋では虫の音を雑音として聞いているかも知れませんが、国立公園では入場者数を制限し、レインジャーが同行するエコツアーを行い、その中での教育啓蒙活動を通じて、参加者は自然を享受しています。もちろん双方ともこれが全てであるという事ではありません。

では、戦後、日本人とホタルとの関わりはどのようなものだったのでしょうか。戦後の経済成長を遂げるなか、身近な環境は急変し、ホタルの数は激減・絶滅していきます。それを憂う人々は保護・養殖・放流を試みてきました。都会の広場や料亭で放ったホタルの鑑賞は、自然の復元にはなりませんが、人々の心を和ませてくれたことと思います。

一方、絶滅してしまったところに放流して復元させるということも行われてきました。絶滅したところにホタルを呼び戻したいという気持ちは大変強く、そのような場所に養殖したホタルを提供し根付かせてゆくということも、時代背景のなかで当然のことでありま

した。

しかし近年になって、生物の多様性と固有性という認識がなされるようになってきました。それは、多種多様な生物がいるけれども、それらは世界中に均一に分布しているわけではなく各地域で固有に生息しており、その分布には意味があるということです。ゲンジボタルは日本固有種ですが、北海道と南西諸島には生息していませんし、クメジマボタルは久米島にしか生息していません。さらに遺伝子レベルでは、フォッサマグナなどの地質構造に対応したゲンジボタルの遺伝子型の分化が認められています。このような地域の固有性は、ゲンジボタルがたどってきた歴史、すなわち今の地形が出来上がる前から、元の陸塊に生息していたのか、今の地形が出来上がった後に進入してきたのかなどの情報が、今の分布の状況や遺伝子に刻み込まれているということなのです(本ニュースレター No. 15, 2000)。

このような情報は形として見えるものではありませんし、人為的に攪乱して無くなったとしても、人間の生活には何の影響もありません。むしろ、日本に生息していない、めずらしいクワガタムシなどをどんどん輸入していくことの方が、よっぽど経済的で人々の嗜好を満足させてくれます。それによって日本固有の虫がいなくなっても我々の生活には全く関係ありません。しかし、生物の多様性・固有性が認識されるようになった中で、そのようなことを、敢えて行う必要があるのでしょうか。形あるものは文化遺産として保存されていますが、形にならない情報を自然遺産として捉えることはできないものなのでしょうか。それを認識し、後世に伝え生かし

ていけるかどうか国家・国民の品格のように思います。

生物学に携わる者として、生物地理学的な情報はできるだけ保存していきたいと願うところですが、現実には人間活動との兼ね合いにおいて、妥協点をみいだしていかなければなりません。ホタルを復活させたいという思いと、自然遺産としてのホタルの地域固有性を保存していきたいという思いから、ホタルの移植における妥協点として、次の三原則を唱えました(本ニュースレター No.17, 2001)。

1. 生物地理学上、本来生息していない地域へは移植しない。
2. 数を増やすために他地域から移植するのではなく、本来生息しているホタルを保護していく。
3. 自生のホタルが絶滅し移植を試みる場合は、最も近い水系のホタルを導入する。

日本人は、ホタルと共に桜や鯉にも特別な思い入れがあります。日本中、ソメイヨシノです。小・中・高・大学と校庭にソメイヨシノが植わっていない学校は無いのではないのでしょうか。日本人のホタルへの思い入れは、単に「靈魂化虫」の思想によるものではないのかも知れません。

■ 2006 年度日本ホテルの会事業報告

日本ホテルの会の活動状況については、ニュースレター誌上においてイベントの報告、会計報告などでお知らせしております。しかし、当会は、会員が一同に会しての報告の場がありません。これは、会の運営規模が小さく、予算やマンパワーが足りないため、現状でやむを得ないことと考え、会則でも、総会等を規定しておりません。しかしながら、会員の皆様からお預かりした会費で運営している以上、何らかの形で会の状況をご報告する必要があると考えております。このことから、今年度からニュースレターにおいて、会の運営状況、活動状況について、報告することにしました。

なお、会計報告については、これまでと同様にまとめ次第ご報告させていただきます。

1. 会の体制

(1) 会員数

2006年度期首及び期末の会員数は次のとおりとなっております。

年 度	法人会員	公的会員	個人会員	計
2005年度末	2	8	140	150
2006年度末	2	6	147	155

近年は、自治体の退会が増えていますが、ホームページ開設以後個人会員は増加する傾向にあります。

(2) 役員体制

当会役員任期は2年となっています。2006年度は、長年会長を務めた矢島稔氏が退き、新体制となりました。2006年度～2007年度役員体制は次のとおりとなっています。

会 長	本多和彦
副会長	鈴木浩文
理 事	小西正泰、川村善治、荻野昭、小俣軍平、常喜豊、井上久彌、井上務、 古河義仁、渋谷桂子、山口孝
会 計	山口 孝
監 査	荻野昭、小俣軍平

【事務局】

事務局長 井上久彌

井上務、古河義仁、洪江桂子、山口孝、後藤洋一

事務局業務は、事務局に会長と副会長を加えた体制で進めております。
なお、矢島前会長は、名誉会長に就任しました。

2. 財政及び運営

(1) 財政

日本ホタルの会は、基本的に会員の会費によって運営されています。2005年度の会費収入は、605,000円となっています。この収入に加え若干の寄付金等の収入と繰越金によって運営していますが、財政的には、当会会則に定められたニュースレターの発行、各種イベント開催に必要な最低限の資金を調達するのが限度で、ニュースレターの作成やイベントの実施、日常的な会議などに参加するスタッフの人件費、交通費等は、各自の個人負担となっています。

このような現状では、継続的な運営が困難になる懸念がありますので、健全な運営のために支出の抑制と財源の確保が急務と考えています。

昨年度は、支出削減の一環として事務局を役員宅に移し、家賃支出を減らしました。

(2) 運営

当会の運営は、理事会及び事務局会議により行っています。

■理事会 会の活動計画の決定、会則の改正、重要課題への対応などを審議します。

2006年4月15日 7月22日 9月16日 12月9日

2007年3月24日 計5回開催

■事務局会議 理事会で決定した活動計画を実施するとともに、ニュースレターの内容の検討など、会の具体的な運営を協議、決定します。

2006年5月14日 6月11日 8月19日 10月21日 11月18日

2007年2月3日 計6回開催

3. 活動報告

主な活動として、ニュースレターの発行、ホームページによる情報発信、各種イベント開催を行っています。

(1) ニュースレターの発行

ホタルのニュースレター第37号～第40号を発行しました。

(2) ホームページによる情報発信

ホームページでは、当会の活動方針をはじめ、イベント案内など日本ホタルの会の情報を

発信しています。昨年度は、参加型ページのルキオラ・クラブを創設し、ホテル図鑑の作成を始めました。また、メールマガジンの配信を行っています。

昨年度アクセス数 2005年度末 82,500件 2007年度末 118,000件

2006年度アクセス件数 35,500件

(3) イベント活動

観察会	2006年6月24日	八王子市館町 協力：池の沢に蛍を増やす会
シンポジウム	2006年10月29日	ホテルサミットin八王子 共催：東京ホテル会議、創価大学
談話会	2006年9月16日、2007年3月24日	2回開催

4. 会則改正

昨年度は、3度の会則の改正を行いました。(ただし、最終の改正は2007年4月1日施行)。

改正では、矢島会長退任に伴いまして、名誉会長職を設けるとともに、会員資格に関する規定を設けました。これまで、退会に関する規定が不明瞭でありましたので、喪失及び退会を会則に盛り込んだものです。

5. 2006年度活動について

財政、運営に記載しましたが、現在の日本ホテルの会は、厳しい財政状況のもと理事各員のマンパワーによって動いています。このような体制で、全国的な活動を展開することは困難です。従いまして、イベントは、理事が活動可能な首都圏に集中しているのが実情です。この状況を改善しなければなりません、一朝一夕に進むことはありませんので、2006年度は、会員サービスの中核であるニュースレターの充実とホームページによる情報発信に力を注ぎました。2007年度はこれに加えて、2年続きで単独での開催ができなかったシンポジウムを復活させようと考えています。これを第一歩とし、シンポジウムの他都市圏での開催なども視野に入れていきたいと考えています。地方での活動には、それぞれの地域における活動団体との協力関係が不可欠と思いますので、会員の皆様からのご協力が得られますよう努力してまいります。

事務局からのお知らせ

活動報告

【ホタル観察会 in 羽村】

去る2007年6月24日(日)東京都羽村市において、ホタル観察会を開催しました。観察会は、当地で長年にわたりホタル復活、保全に努力されてきた羽村蛍研究会の全面協力得て実現しました。約40名の参加の皆さんは、まず、水車のまわのお蕎麦屋さんに集合し、羽村蛍研究会との交流会を行いました。その後、明るいうちに発生地を観察し、夕食後、



ホタル生息地周辺の様子

ホタル観察を楽しみました。交流会では、日本ホタルの会会長から参加者と羽村蛍研究会にお礼のあいさつを述べ、続いて、羽村蛍研究会会長から歓迎のごあいさつをいただきました。次に、日本ホタルの会古河理事からホタルの生態やホタル観察のときの注意などを説明し、羽村蛍研究会の羽村さんから、地域のホタル保護活動についてお話を伺いました。田園、森、川と自然に恵まれている羽村にも、自然が失われ、ホタル復活を目指した日々があったことに驚かされるとともに、研究会の努力に感動しました。

夕食後のホタル観察は、あいにくの雨となり、気温も下がってホタルが出るか心配されましたが、午後7時30分ころから発光が始まり、十数頭ほどのゲンジボタルの飛翔を見ることができました。参加者には、初めての人もいらっしゃいましたし、毎年参加いただいている会員の方もいらっしゃいましたが、どなたも美しいホタルの光にご満足いただいたことと思います。



ホタル保護活動について説明する
羽村さん

最後に、雨の中熱心にご説明、ご案内いただきました羽村蛍研究会の皆様に誌面を借りまして厚くお礼申し上げます。

イベント情報

日本ホタルの会シンポジウムを開催しますのでお知らせします。今年は、シンポジウム後に懇親会(有料)を予定しています。皆様のご参加をお待ちしています。事務局までお申し込み下さい。

第15回ホタルを通じて身近な自然を考えるシンポジウム
テーマ「ホタルを育てることの意味を考える」

ホタルを保全あるいは再生するためには、ホタルを飼うという行為が必要となることがあります。シンポジウムでは、このことに焦点をあて、ホタルをシンボルとした環境保全について考えます。

基調講演では、東京大学の鷺谷いづみ先生から身近な自然の生物多様性や生態系の大切さなどについてご講演いただき、その後、立場を変えた三者から切り口の異なるアプローチを示していただき、総合討論で、それらを踏まえたホタルの保全・再生、さらには環境の保全へのかかわり方について考えます。

主 催 日本ホタルの会

後 援 環境省(予定)

日 時 2007年8月25日(土) 13:20から16:30

場 所 全水道会館

東京都文京区本郷1-4-1

(JR水道橋駅東口下車徒歩2分、都営三田線水道橋駅A1出口徒歩1分)

参加費 無料

【 内 容 】

(1) 基調講演

東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 鷺谷いづみ氏

(2) 講演

(株)ヒューマンデザイン 生物生態研究所代表 千葉 豊氏

創価大学蛍桜保存会 後藤洋一氏

横沢入の保全関係団体から

(講演者等は予定です、変更となることがあります)

(3) 総合討論

※閉会後会場を移して懇親会(有料)を予定しています。(17時から2時間程度)

シンポジウム及び懇親会に参加を希望される方は、事務局までファックス、郵送、メールにてお申し込み下さい。

2007 子どもホタルンジャー活動参加団体募集のお知らせ

環境省は、平成19年度「こどもホタルンジャー」活動参加団体の募集を始めました。日本ホタルの会名誉会長矢島稔も審査委員の一人として参加しています。

矢島名誉会長のメッセージと問い合わせ先は、次のとおりです。

「夜空に「ありがとう」と飛ぶホタル」

ホタルンジャーは日本の自然環境が今のままでいいのか、どうしたら良くできるのかを話し合い、力をあわせて身近な流れを掃除し、生きものがこれ以上少なくならないために体を使って環境を守ってくれるグループです。川があってカワニナがいるためにはいろいろな条件が必要で、それがみんな上手に守られてこそホタルが飛びます。ホタルンジャーは日本の未来を美しくするための大切な仕事を根気よく続けてくれるグループで、その努力を重ねれば、きっと美しく光るホタルはそのお礼に夜空を舞ってくれるにちがいありません。 〈 矢島 稔 〉

(財)水と緑の惑星保全機構「こどもホタルンジャー事務局」

〒105-0003 東京都港区西新橋2-16-2 3F

TEL 03-3433-4454 FAX 03-3433-4510 E-Mail hotaru@mizumidori.jp

ホタルンジャー・ホームページ <http://mizumidori.jp/hotaru/>

【編集後記】

4月から7月は、ホタルの最盛期といえる時期ですね。会員の皆さんの1年の努力がホタルの光で報われる、そういう時期でもあると思います。日本ホタルの会でも、年間イベントの一つである観察会を無事終え、役員一同ほっとしています。

もう一度気合を入れなおしてシンポジウムに向けてがんばらなくては！

ホタルのニュースレター（第41号） 2007年7月10日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

197-0011 東京都福生市福生 487

日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 042 - 530 - 2111

e-mail : inoue@nihon-hotaru.com

URL : <http://www.nihon-hotaru.com>



印刷 文明堂印刷株式会社

239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀町 1-5

TEL : 046-841-0074 FAX : 046-841-0071